

ほんとうのしあわせ

——仏縁に恵まれて真の人生——

河村とし子

もくじ

一	キリスト教を説く……………	1
二	慕わしい人間親鸞……………	12
三	なぜ浄土真宗か……………	24
四	お念仏が出る……………	33
五	姑 <small>しゅうじゆめ</small> との出遇い……………	40
六	本当の幸せ……………	53
七	真実の宗教……………	63

一 キリスト教を説く

ただ今ご紹介いただきました河村とし子でございます。山口県の萩^{はぎ}という町からまいらせていただきました。

「仏縁に恵まれて真の人生」という講題を掲げさせていただきましたのはわけがあるのでございます。実は四年ほど前、アメリカ合衆国のハワイをのけました本土の浄土真宗の仏教婦人会の大会が、カナダに近いポートランドという非常にきれいな町で開かれまして、その記念講演をおおせつかつてまいました。そういう時は日本の場合ですと、(例えば今夜なんかも)どういう講題にしますかということをお尋ねいただくでございます。ところがア

メリカの場合はその大会をお引き受けになるということが決まりますと、そのお引き受けになる方々がまず講題をお決めになります。講題をお決めになってから、それではじゃあ誰を呼ぼうかという日本と逆の形なんでしょう。で、二年前にお決めになったその講題というのが「仏縁に恵まれて真の人生」という講題でございました。

そういう講題をお決めになって、そして私を呼んでくださったということをお聞きまして私は本当に嬉しゅうございました。「仏縁に恵まれて真の人生」、本当に仏縁に恵まれたことによつて、それまでの私の人生とその後あとの人生というものがまるつきり変わってしまった。それから後が私の本当の人生だったということをつくづくと思わせていただくわけなんです。

どの先生にうかがったことか忘れましたが、この浄土真宗おみのりの御法で

は私どもは三度の誕生日を迎えさせていただく。まず第一の誕生日というのは、お母さんのお腹なかから「オギャー」と生まれさせていただくということ、産んでいただいたその時が第一の誕生日。第二の誕生日というのは肉体の親さまでなしに、本当に心の親さまと仰ぐその心の親さまとの出遇であい、み仏ほとけさまとの出遇い、それが第二の誕生日なんだそうでございます。で、第三の誕生日というのは、この世の縁が尽きて、つまり亡くなりました時にみ仏さまのお国に、お浄土おうじょうに往生おうじょうさせていただく、往いつて生まれると書きます往生おうじょうでございますけれども、それが第三の誕生日だということをお聞きすることがございます。

今日は「仏縁に恵まれて真の人生」という講題を、そういう意味で私にとりまして本当に思い出ぶかい、感慨かんがいぶかい題をつけさせていただきます。

それで、私がどういふ道すがらでその第二の誕生日を迎えさせていたのか、つまり仏縁に恵まれることができたかということに聞いていただくと思っております。

初めにお断りしておきますけれども、おそらくここでお話なさいます先生方と違ひまして、私はまったく皆さまと同じ一人の在家の女にすぎない者でございます。ちつとも難むずかしいことは何も知りません。ですから、私がいふの場合にでも口ぐせのように申し上げておりますのは、この浄土真宗という御法は世界無比むひなんだということ。そして、日本の民族の中でどなたか一人この方をこそと挙あげてごらんと言われましたら、私はためらわずに親鸞しんらん聖人という方を、この方をお挙げすると思ひます。そのすばらしい方に出遇わしていただいて、その方のみ教えを心の支えとさせていただけ

幸せを皆さまとともどもに喜ばせていただきたい、ご讃嘆さんたんさせていただきたいという思ひだけで、おこがましくもお招きいただきましたのにハイハイと出てまいりましたわけでございます。ですから、どうぞお仲間同士の気楽な話とお思ひくださいまして、のんびりと聞いていただきたいと思ひます。

私は今、本州の一番西端の下関から山陰線をちよつと東へ戻つてまいります萩という町に住んでおります。そこは私の主人の郷里きょうりでございます、私はむしろ京都から近い京阪神の神戸に続いております明石という町に生まれ育つた者でございます。私の家は明石で非常に熱心なクリスチャンの家庭で、プロテスタントでございます。私の祖父そふは自分の土地にまったく私財でキリスト教の教会堂を建てまして、改築されましたけれどそれが今も明石教会として残つております。そして、牧師さまをお招きしてあのあたり一円にキ

リスト教を弘めたという、そういう家庭に生まれ育った者でございます。ですから、もの心がついた時からキリスト教の日曜学校に通っております。私の生涯にキリスト教を捨て去るようなときが来ようというようなことは夢にも考えておりませんでした。

旧制の女学校まで明石におりました、それから進学のために東京へまいりました。ちょうど山口県の萩から進学のために上京してきておりました主人との出会いがございまして、婚約するまでになったんですけれども、私は一人娘でございましたから主人の方が養子に来てくれるということで婚約しておりました。もし、初めから私が他家へ嫁ぐんだったらクリスチャンの家庭以外は選んでなかったと思います。ところがその矢先に主人の跡取りの兄が戦死いたしました。あの当時のことですし、田舎のことでもありますから、

跡取りになった息子を他家に出すわけにはいかないというので、さんざん懇願されまして、私の方が戸籍の上だけ河村の方に移るということで結婚することになりました。

でも、その結婚に、二つの条件がつけました。一つは河村の家の方から、生涯郷里の山口県には帰って来なくてもいい、もう東京で勤めることになっておりましたから、生涯東京住まいでいいということ、それがまず一点。それからもう一つの条件は、これは私の方が出した条件ですけれども、河村の家が何宗であろうとも私は生涯クリスチャンで通させてもらいますけれどもそれでいいですか、というその条件のもとに結婚いたしました。

ところが人生というのはわからないもので、あの東京の空襲の始まります直前に、空襲をさけて小さい子ども、本当に半年ぐらいと一年という年子

でございますその二人を連れて一時的に疎開しておいてくれ、そのうちに空襲のない所へ家移しておくからということで疎開して帰ってまいりました。帰ってまいりましたのは、もう萩市も一番はずれなんでございます。中国山脈が日本海に近く出っ張っておりますので海へは近いんですけども、本谷に谷あいの、伝え聞くとところによりますと下関の壇の浦で滅んだ平家の残党が、九州の方に流れたり、日本海に流れて上陸して住みついたんだそうです。ですから海に近い平地でなくて、山あいの本場に落ち武者の隠れ住むような所に、今も三軒しか家のないそんな所へ帰ってまいりました。

私が帰ってまいりました時には、両親はかなり年老いて家業の農業を守っておりましたけれども、そこへ帰ってまいりまして一番ハツといたしましたのは、在家に珍しい大きなお仏壇なんです。三方開きを開きますと二間はこ

ございます。その大きなお内仏さまの前で朝晩に、あとの二軒も分家ですからその本家のお内仏さまの前でいねいにおつとめしている、そういうところにクリスチャンの嫁の私が帰ってまいりました。キリスト教の方では神棚とか仏壇とかか形のあるものを拜むということは偶像崇拜と申します。偶像を拜むような宗教は程度が低いんだと教えられておりましたから、こんな金ピカの大きな偶像を拜んで何やらわけのわからないお唱えごとをしている、気の毒な人だとまず思っただけです。

クリスチャンとして小さい時から心に刻みこまれておりましたことは、
「信者はすなわち伝道者たれ」ということ。つまり「キリスト教の伝道をなさるの**は**牧師さまのお仕事だけじゃない、一人ひとりの信者が伝道すべきだ」ということ**で**ございましたので、こんな思いがけない所へ来たというの